

XenosagaI・II - 第二十話 鼓動 - Herz -

??? : ———ラ。
———アソラ。
———ベド・ピアソラ。
———アルベド・ピアソラ。
??? : 誰だよ———
俺は分子になって漂い続ける———
この消滅へのひとときを愉しんでるんだ。
分子に話しかけるなんて、非常識なことをご遠慮願いたいね。
??? : 分子レベルで意識を保ち続けることの方が非常識だと思うが———
??? : いまはそれはよい。
さあ、君の力を使うときだ。
??? : よせよ、俺は———
??? : 我らが手を貸そう。いま、君をふたたびウ・ドゥと接触させる———
??? : よせと言っている。俺は———
俺は——！

鼓 - Herz - 動

シオン：KOS-MOS、あなた、なにをしたの——！
KOS-MOS：相転移現象によって、局所事象変移を現宙域内に固定いたしました。
拡散を防ぐため、もっとも有効な手段であるとの判断からです。
モモ：——空間情報の書き換え、たしかに進行が止まっています。
シオン：だからといって、あんな危険な装備を自分の判断で——！

KOS-MOS: シオン、私にはあなたに迫る危機を排除する義務が課せられています。すべては、そのための判断です。

シオン: 義務——誰に課せられた義務よ！

KOS-MOS: お答えできません。

シオン: KOS-MOS——

KOS-MOS: ですが、現状でひとつ警告しておくべき事項があります。

相転移ユニットは最大出力で、現在も稼動を続けています。

このままでは、いずれ稼動限界に達し、機能停止することになるでしょう。

シオン: そうなったら、また局所事象変移の拡大がはじまる——

KOS-MOS: その通りです。

マッシュズ: ——

——よくわからねえんだが、その拡大が起こると、どうなるんδει？

ケイオス: 物理事象の情報が書き換えられていくわけだからね。

この宇宙が僕らの知らない世界へと、変貌していくだろう。

マッシュズ: 知らない世界って——

トニー: おいおい、そんななかかわからねえ状態、たまったもんじゃねえぜ！

ハマー: そうっすよ、誰かなんとかしてほしいっすよお！

ケイオス: 誰か——と言っても、これまでの戦闘で、オルムス艦隊は連邦に敗れ去り——

連邦艦隊は Ω システムに駆逐されてしまった。

いま、この宙域にいるのは、僕たちだけなんじゃないかな。

モモ: ええ、モモの策敵範囲には、エルザ以外の人工物体は観測できません。

ハマー: そ、そんなあ～～。

ジギー: やるしかあるまい、我々の手で——

ジン: その通りです。私たちは、オリジナルゾハルを求めて、この地へ集まってきた。

その結末がこの事態であるなら、最後までおつきあいすべきでしょう。

シオン: 相転移砲が稼動限界に達する前に、事象変移を停止させる——

でも、あれはゾハルの力で発生した現象——

私たちに、なにかできることがあるというの——？

ジン: シオン——

シオン: 兄さん、その先は言わなくてもいいわよ。

もう手遅れにならないよう、今度はもっとはやく歩き出す。そのつもりよ、いまの私は。

ジン: これは——一本とられましたね。

ジギー: まずは情報収集だな。敵の正体がわからなくては、話にならん。

モモ: モモにまかせてください。観測用レアリエンの機能、ここで役立てないと！

カナン: 俺もバックアップしよう。この船の端末を使わせてもらうぞ。

ハマー: わかったっす。いまリンクさせますよ！

シオン：みんな――――

（―――それにしても、Jr. くんはこんな時にどこへ―――？）

ハマー：あの――――

ジギーの旦那に、通信が入ってます。

ジギー：俺に――？

ハマー：ええ、接触小委員会からっすね。

――

Jr.：（たしかにアルベドの分子が、あいつのかけらがあの時――俺の中を通り過ぎていった――

なんであいつ、十四年間も俺を――――

だましてたんだ――――）

シオン：あ、Jr. く――――

???：（よう、ルベド――――）

Jr.：――――アルベドか。

アルベド：（くっくくく、戻ってきちまったぜ、肉の檻へ――――）

Jr.：お前――――死ねなかったんだな――

アルベド（おや、驚いてくれないのかい？）

Jr.：ああ――――

さっきから右の胸で、お前の鼓動がうずいてやがるからな。

アルベド：（くっくくくく、なるほど――――

見ろよ、ルベド――！ この美しい宇宙の歪みを！）

Jr.：歪み？

アルベド：（ついにきたのさ、永遠の連鎖に連なる時が――！ 渴望の源を埋める時が――！）

Jr.：アルベドッ、お前、そんなことを望んでいたはずじゃねえだろうっ！

アルベド：（来いよ、ルベド――俺は待ってるぜ

わかるだろう、その意味が？）

Jr.：ああ、行ってやらあ――――！

アルベド：（くくく――待ってるぜ――――

――――）

Jr.：アルベド――――

シオン：———ここにいたのね。

Jr.：あ、ああ、シオンか———

シオン：いま話してた相手———
アルベドね？

Jr.：聞いてたのか？

いや、あいつの声は、俺にしか聞こえてないはず——

シオン：Jr. くん、何度も呼んでたじゃない。

Jr.：あ、そうか———そうだな。

シオン：生きてたんだ———Jr. くん、嬉しい？

Jr.：———

あいつ、俺を呼んでるんだ。どうしても、決着をつけたがってる。

シオン：でも、大切な兄弟なんでしょ。本当に彼と戦えるの？

Jr.：戦えるさ。俺の胸の中のなにかも、戦いたがってる。

———あいつと同じように。

あいつを——アルベドをこのまま放っておくわけにはいかない。

あいつを止められるのは、俺しかないからな———

シオン：Jr. くん——

Jr.：ジギーの様子はどうなんだ、まだ動けないのか？

シオン：さっきユリさんから通信が入ったわ。

この船に転がってるパーツでなんとか修理できるよう、指示してくれたみたい。

Jr.：そうか——ちょっと様子を見てくるわ。準備が整い次第、すぐに出撃する。

みんなにも待機するように伝えておいてくれ。

シオン：———わかった。

—

ユリ・ミズラヒ『——これで、そちらのパーツもジグラットシリーズに対応できるはずです。

もっとも、応急処置ですので、帰還後、正式なカスタムパーツに換装した方がよいでしょう。』

ジギー：ありがとうございます、ミズラヒ博士。

ユリ・ミズラヒ『ユリでけっこうよ、博士という肩書きには、もううんざり。

ところで話があるのだけど——ジャン・ザウアーさん。』

ジギー：自分はジグーいえ、なんでしょう。

ユリ・ミズラヒ『あなたは生体部分の延命を拒んでいるそうね。

とはいえ、蘇生されてからすでに一世紀――

延命処理を施さない生体脳の寿命は、平均130年。

もう少しだけ、生き永らえてくださらないかしら、――――モモのために。

それに、私もあなたから学びたいことがあるの。あなたの生き方から――』

ジギー：――少し、考える時間をいただけますか。

ユリ・ミズラヒ『ええ――よい返事を待っています。』

ジギー：――――なにか、話があるのか？

Jr.：わりいな、立ち聞きしちゃった。

ジギー：かまわん、聞かれてまずいことは何もない。

Jr.：そっか。――あのさ、ちょっと意外だったよ。

ジギー：なんのことだ？

Jr.：Ωシステムでさ、あんたが怒るとこ、初めて見たような気がする。

おっさんにも、あんな感情が残ってたんだな。なんか――正直、安心した。

やっぱり、あんたも人間なんだな――って。

ジギー：――――

Jr.：それに――なんだよ、あんただって、自分の敵には全然クールになってなかったぜ。

ジギー：ふっ――それはお互いさまだ。

Jr.：違うない。俺、あいつのことになるとダメなんだよな。

わけがわからなくなっちまう――

ジギー：Jr.、俺にはお前がなにを考えているのか理解できないし、それを否定する気もない。

お前の気がすむようにすればいい。

Jr.：おっさん――――

ジギー：聞き分けのない奴には、ガツンと言ってやれ。

Jr.：ああ、そのつもりだ。それとさ――――

――――おっさんはさ、あのヴォイジャーって奴との間に、なにがあったんだ？

ジギー：――――

Jr.：わりい、話したくないなら、無理に――

ジギー： いや、かまわん。

奴は——ヴォイジャーは、俺からもっとも愛する者たちを奪ったのだ。

Jr.： —————！

ジギー： 俺は奴の誘いから逃れるため、自ら命を絶った———

だが、それは———いまにして思えば、逃げだったのかもしれん。

Jr.： おっさん———

そりゃ——たしかにあれだけ怒るのも無理ないよな——

ジギー： いや、怒っているのは——逃げた自分に、だ。

Jr.： 逃げた自分———

—————

おっさん、いろいろためになる話、ありがとな。

ジギー： Jr. ———

Jr.： 俺、自分で自分に腹たてないですむように生きてみるよ。

ジギー： ああ、それがいいだろう。

Jr.： じゃ、行くわ———

—

モモ： 行くんですね、あの場所へ——

Jr.： モモ——

みんなに気づかれないようにと思ったけど、さすがは百式だな——

モモ： ひとりで行くつもりなんですか？

Jr.： ———

モモ： どうしてなんですか？ Jr. さん、いつもひとりで抱え込んで——

モモも———もモモ一緒に行っちゃだめですか？

Jr.： 呼んでるんだよ、あいつが。俺じゃなきゃ——駄目だってな。

本当の兄弟だからな。威張れるような、いい兄貴じゃなかったけど——

最後のケジメぐらい、自分でつけたいんだよ。

モモ： Jr. さん——

Jr.： すまねえな、みんなにはうまく誤魔化しといてくれよ。

モモ： 帰って——きますよね。

Jr.：――――

モモ：約束してください、必ず帰ってくるって。

　　じゃなきゃ、モモ――

　　モモ――――

Jr.：わりい、俺――――

モモ：――――

???：モモちゃん、そんなので納得しちゃダメよ。

モモ：シオンさん――――！

Jr.：みんな――――

　　だ、誰もついてきてくれなんて、言ってねーぞ。

ケイオス：Jr.、なにか勘違いしているよ。

ジギー：我々は、お前とともに兄弟のもとへ行くわけではない。

　　局所事象変移を終息させるために、その中心に向かうだけのことだ。

シオン：君には君の理由があるように、私たちにも、あそこへ行かなくちゃならない理由があるの。

Jr.：――――知ってるよ。

　　いろいろ乗り越えてきた、仲間だもんな。

ジン：Jr.くん――――

Jr.：けどな、こっちもわかってて言ってるんだ。

　　あそこには、俺ひとりで行く。

　　っ――――モモ、お前――――

モモ：いまのは――サクラお姉ちゃんの代わりです。

Jr.：サクラの――――

モモ：きっと、サクラお姉ちゃんは Jr. さんたちの争いを悲しんでいます。

　　でも、あの人は――だから、モモが――――

Jr.：なあ、モモ――それにみんなも――――

　　俺がひとりで行こうと思ったのは、俺を見られたくなかったからだ。

シオン：Jr. くんを――？

Jr.：ああ、俺は奴の前で、もう自分を偽らねえ。

　　俺と奴の望みを、同時にかなえてみせる。

　　そのときのあさましい姿を、あんたたちに見せたくなかったんだよ。

でも——そんなこと、気にする必要なかったのかもしれねえな。

モモ：Jr. さん———

Jr.：俺の本当の顔を見ても、汚れた手を見ても、モモは平気か？

モモ：はい！ きっと、みんな同じです——

ですよね、シオンさん。

シオン：え？ ええ———

（私の手だって汚れてるもの———）

Jr.：———わかった、行こう。あそこへ乗り込むあんたたちに、俺がついてってやる。

それなら、かまわないぜ。

ジギー：まあ、そのあたりが妥協点というところか。

Jr.：ちえっ、ひっかかる言い方だなあ。

局所事象変移

シオン：私たち、E.S. で乗りこんできたはずなのに——

モモ：ここ、モモにはわかります。

あのとき流れ込んできた、あの人の心のなか———内的世界———

シオン：モモちゃん、大丈夫？

（あの時の恐怖が——？）

モモ：は、はい——平気です。

Jr.：———こっちだ。奴はこの先にいる。

モモ：あ、Jr. さん！

Jr. さん———

ジギー：兄弟との対決が近い。あいつにも余裕がないのだろう。

モモ：はい———

—

アルベド：よく来たね、ルベド。また、仲間もどきを作ったのかい？

意外だなあ、君は怯えてしまって、もう、周りに人を近づけたりできなくなってると思ってたよ。

Jr.： うるせえ、お前とは違うんだ。

アルベド： 強がっても無駄さ、怖いんだろう？

あの時みたいに、新しい仲間も見捨ててしまうかもしれないから――

見殺しにしてしまうかもしれないから――

ははは――いくじなしの君らしいよ！

【 戦闘 VS アルベド 】

アルベド： 来なよ、本物の僕に会いにくるんだ。それまで、君の心が持ちこたえられればの話だけどね。

Jr.： ――――行くぜ。

シオン： Jr. くん――――

――

シオン： ――――アルベド！

Jr.： いや、違う――

シオン： 違う？ でも、あれは――――

Jr.： あいつはもう、かつての自分を棄ててしまった。

あの姿でさえ、破壊されたがってる、過去の自分ではないのさ。

モモ： 破壊されたがってる、過去の自分――

アルベド： よう、ルベド――まだその人形を可愛がってるのか。

モモ： ！

（人形――――）

アルベド： そんな玩具でしか自分を慰められないなんて、お前もかわいそうな男だよなあ。

Jr.： アルベド――お前っ！

アルベド： その人形が大切なのか？ でも、もう遅いなあ。

そいつは汚れたんだ、この俺の手でなあ――

モモ： （――――――）

Jr.： やめろ――それ以上言うな！

アルベド： そいつの感触――とっても気持ち良かったぜえ。

お前も味わってみなよ、きっと喜んで――

Jr.： やめろって言ってんだろーが！

【 戦闘 VS アルベド 】

モモ： —————

ケイオス： モモちゃん、大丈夫。もう、彼はいないよ————

Jr.： わりい、先急ぐぜ。来られない奴は、ここで待っててくれ。

ジギー： Jr.！

Jr.： —————

モモ： ジギー、みんな、モモ——大丈夫です。

ジン： 無理をすることはないのですよ。

モモ： いえ、モモ——Jr.さんと一緒に行くって決めましたから。

ジン： わかりました、では私たちも行きましょう。

—

シオン： E.S.！？

ケイオス： 違う！ これは————

KOS-MOS： アニマの器の波動を観測できません。外見のみを模倣したものと推測されます。

Jr.： ここは奴の心のなかだからな。あれは、あいつの心を被ってる鎧さ。こんなものにすがりやがって——

アルベド： ハヤク俺ト決着ヲツケヨウゼ 気持チ悪インダヨ、

イツマデモベたべたトマトワリツクオ前ガサ！ ヒャハハハハ————！

Jr.： ああ、望み通りにしてやるぜ！

【 戦闘 VS E.S.シメオン 】

Jr.： 満足したかよ。

———ただどな、俺は全然だぜ。待ってろ————

ケイオス： Jr. —————

—

Jr.： アルベド――――

ジギー： アルベドだと？ だが、あの姿は――――

KOS-MOS： 間違いありません。固有の波動が、以前の観測値と一致します。

アルベド： そうさ、俺だよ――よく来たな、ルベド。見ろよ、この俺を！

俺はついに欠落[かけら]を埋めた。体こそ失くしたが、実に爽快な気分だ。

シオン： 事象変移を止めて！ いまなら、まだ間に合うわ！

Jr.： よせ、シオン。言ってみろ奴じゃねえ。

アルベド： くっくくくく――――” 悔い改めよ[ペニテンツィアジテ]” か――嫌なこった。

俺は不死者の務めとして、人類にまったく新しい視点を用意してやったんだぜ。

ケイオス： （不死者の努め――――）

アルベド： かつて、ウ・ドゥと部分的に連結[リンク]した時、進化の梯子を上った俺は見た。

ヒトが営々と築いてきた、文明という斜塔をな。

いや、塔ですらない！ 乏しい知識と貧しい手立てで組んだ、腐り木の足場――

だが、親切な人間なら、こう言ってやるべきじゃないか？

もしも――し、間違ってますよ――

――――とさ！ ひゃあっはははは！

Jr.： ―――――

ジギー： お前はそのまま、なにをするつもりなのだ。

アルベド： さあな、領域シフトを起こして、この宙域ごと、高次領域へ突っ込むか。

神を乞うんじゃない、俺たち低次領域の生き物が大挙して高次領域へ押しかけるのさ！

見ものじゃないか――それこそ永遠の連鎖だ！ 欠落[かけら]の充足だ！

ヒトと、ヒトを観測者たるよう位置付けた、世界そのものの進化だ！

祝えよ、休日に俺の名が付くぞ。あっち側に、安息日の概念があればだがなあ！

Jr.： そうはさせねえ。俺がこの手で――お前をやってやるからな。

アルベド： 来いよ、俺の陽電子。お前は対ウ・ドゥ兵器――

兵器が、闘争への欲情を恥じる必要はない。

そもそもヒトそのものが、誰かが産み出した兵器みたいなものだよな！

Jr.： お前の言うとおりのさ、俺は兵器だ――

俺の全細胞が闘いを欲しがってる。対存在と衝突したい――てな！

シオン： 待って、Jr. くん！

いいの！ほんとにいいの！？

大切なー

大切な兄弟なんでしょう！

Jr.：どけよ、シオンー

シオン：Jr.くんー

Jr.：悪いな、ずっと昔から決まってるーいや、決めてたんだ。

俺たちは、こういう結末を迎えるってな。

俺は、あいつを改心させるために来たんじゃない。消滅させるために来たんだ。

アルベド：気が合うな、ルベド！俺もそんな気分だぜ。

いますぐ、お前をなぶり殺しにしたいってな！

シオン：そんな愚かしいことー

アルベド：愚かしい？この高揚感、貴様には永久にわかるまい！

ひゃっはははは！

【 戦闘 VS アルベド 】

ルベド：アルベド、なにやってるんだ？

――――！

それは――

アルベド：ふふふールベドとニグレドのお墓を作ってるんだ。

お墓っていっても、真似事だけどね。二人が死んでも泣かないように、練習してるんだよ。

でも、もう一度ウ・ドゥと連結[リンク]したら、ルベドが僕を殺してくれるのかな。

ーやってくれるよね、リーダーだもの。

ルベド：俺はーおまえを殺したりしたくない。

アルベド：へへへーやってくれるよ、ルベドはそういう風に作られてるもん。

シオン：ああー

（こんなーこんな結末しかなかったのー？）

アルベド：やるじゃないか、ルベドー

Jr.：アルベドー

アルベド：どうだ、ルベド。認めろよー愉しかったろう？

Jr.：ああ、愉しかったー血が踊ったよ。

しょせん俺たち U.R.T.V. は戦いの道具、兵器に過ぎないからな。

アルベド： いいや、違うな——俺たちが愚かなのは兵器だからじゃない。

——男[ヒト]だからさ。

Jr.： アルベド———

アルベド： 消滅か——これもある意味、解放と言えるな。少なくとも———

Jr.： もう——誰の死にも怯えずに済む、

———だろ？

アルベド： ルベド、お前———

くっくくく———さすがだな、兄弟。全部、お見通しかよ———

Jr.： ああ、お前の分子を吸収した時からな———

サクラが死んだときのことも——わかったよ。

アルベド： はあ、はあ、はあ———

———！？

これは———

???： ———

アルベド： お前———僕を——求めているの———？

いや、違う———求めているのは———

僕。」

???： ———

アルベド： うん、その通りだ。

僕は——君にアクセスするために、産まれてきた———

サクラ・ミズラヒ： だめ、アルベド！

———

アルベド： あ——あ———

お前———なんで——

サクラ・ミズラヒ： う———

アルベド： ——ル、ルベドのためか？

ルベドのためなら、そこまでできるのか———

サクラ・ミズラヒ： ち——がう——あなたの——ため———

アルベド： ！

な、なに言ってんだよ、お前——

僕はウ・ドゥによって、し、進化するはずだった———

僕の目の前には、高次領域への扉が開かれていた———

なんで、なんで邪魔するんだよおー

サクラ・ミズラヒ：あなたのー本当の望みはーそんなーことじゃない。

アルベド：お、お前に！

なにがーわかー

サクラ・ミズラヒ：あなたはずっとーアルベドとー

ー

アルベド：お、おい、なんでいきなり黙るんだよ。

はやく蘇生しろよ、もうすぐルベドが来るんだぞ！

ルベドにそんなところ、見せるなよー

動いて、動いてくれよおー

あああああああああっー

シオン：私は、わかっていなかった――

アルベドの望み――それを Jr.くんは、すべて理解していた。

だから、彼は兄弟と戦った――

セシリーとキャスの命を奪う命令をくださった私に、その行為を非難する資格はない。

ううん、資格など関係なしに、私は決して彼を責めたりはしないだろう――――

Jr.くんがなすべきことをなした後で流した涙の熱さが、私にはわかるから――――

セシリー、

キャス、

アルベド、

アイ、

中佐――――

私にもいつか、彼らのような安息の時が訪れるのだろうか――――

ネピリム：やっと、彼に安らぎが訪れたのね。

ケイオス：ああ――――Jr.も、シオンも、強くなった。

彼らは自分の手を汚すこともいとわず、大切な人たちに安らぎを与えたんだ――――

ネピリム：それは――過去を乗り越えたということなのかしら――

ケイオス：わからない。でも、彼らは歩き始めたんだ。未来という方角へ向かって――

でも――これで終わりじゃない。

ネピリム：そう、これからが始まり――――

いま、彼女たちを包む世界に小さな波紋が生まれたわ。

この波紋がいずれ大きな波になり、彼女たちをも飲み込んでいく――――

ケイオス：そうだね――――でも、彼らはその波に流されていくような、無力な存在じゃない。

ネピリム：やっと――わかったのね。

ケイオス：僕は――ずっと迷っていた。

シオンたちに、かつての彼らのような重荷を背負わせてしまってよいのか。

でもね、僕が思っていたより、みんな、ずっと強かったんだ。

気づくの――遅かったかな。

ネピリム：いいえ————まだ、時は私たちに味方してくれるはず——

決して、遅すぎはしない————

ケイオス：そうだね、僕もそう思う————